

下村湖人の思想に於ける根本問題

— 教育 の 理 念 —

六 車 進 子

教育の諸問題のうちでとりわけ重要なのはその理念に関するものであり、教育のめざす人間像に関するものである。戦後19年にわたって行われてきた民主主義教育、人間の自由と平等の思想に基づく教育は、すでに自明なものとされて、深くこれを検討されることが怠られている。しかし現在の時点では、我々は民主主義とは何か、自由とは何か、平等とは何かを再び問うことを要請されていると思う。これらの再検討を含めて教育理念の問題は、我々自身が生きて来、現在生きており、未来へ生きようとしているこの時代に固有なものと思われる程切実である。この問題の検討は、我々をして過去の歴史を反省させ、未来への道標を見出させることともなることはいうまでもない。

以上の動機に基づいて、ここに下村湖人の思想に於ける根本問題——教育の理念——を取扱おうと思う。

下村湖人の名はあまり知られていないかも知れないが、その代表作「次郎物語」は知られすぎる位に知られている。そしてこのことは、湖人とその思想が未だほんとうには問題とされていないことを示すものである。本論は「次郎物語」を中心として湖人の思想をみ、これを個人・社会・文化にかかわらせつつ湖人に於ける正常に発達した社会人とは如何なるものか、すなわち社会的観点に立つ人間像を考究し、教育の根本的意味を問い、その現代に対して持つ意味を知ろうとするものである。

一. 問 題 提 起

まず「次郎物語」に於ける湖人の企図・基本的な態度について若干の説明をする。

「次郎物語」は宗教書でもなければ、教訓書でもない。一般に考えられているように単なる児童文学でもない。それは確かに教育的立場に立って書かれているが、単にそれに留まらず、広く「人間と社会」に関する書であるといえる。それは一人の人間の成長の過程を描くことによって作者の世界観を示しているものであり、「人間と社会」の問題を概念的なものによらずに、具体的な人物の姿によって説明してゆこうとしたものである。

「物語」は文学者湖人の美しい表現によっての「人間と社会」に関する思想の書である。この意味に於いて、またそれはその内容の深さに於いて、ジャン・ジャック・ルソーの「エミール」を想起させるものである。しっかりした構成と豊かな陰影とによって、作品内容の深さが印象づけられる。

湖人は「物語」の起草に関して次のように言っている。「私自身としては、小説を書く気でこの本を書いたのではない」、「私にとって、それが小説になっているか否かは全く問題ではない。私は、ただ、私の書きたいことを、それにふさわしい形式で表現して見たいと思っただけである」。¹⁾ 作品構成に於ける論理と心理とのこのような統一は、教育と文学との統一という湖人の時代的課題と無関係ではない。それは、我国の近代文学があくまで自我肯定の立場に立っていたのに対して、教育はむしろ反対に自我否定の立場をとって居り、従って教育者の立場は反文学のそれであった時代に、湖人自らが相反するものの中に身を置いたことを示している。「元来私は、何かの規準を設けて、小説と小説でないものとを区別しようとする考えを、全く無用だとさえ思っている」。²⁾ 同時にこのことは、湖人の人間把握の仕方そのも

のを示している。それは人間の自然性の内に激しい論理を追求し、論理を自然との深い交渉に於いて追求しようとする態度である。すなわち人間に於ける論理性と自然性とを統一的に把握しようとするのである。この論理性と自然性、普遍的なものの特異的なもの、社会的なものと個人的なものとの調和的統一ということは、湖人に於ける重要な主題のひとつである。

湖人が「物語」第1部を出版しはじめたのは昭和16年である。彼がその構想を描き始めたのが明治40年であるから、「次郎」はまさしく34年もの間、湖人の内ですでに育てられてきたことになる。湖人は「次郎」の成長の叙述に要したこの長い年月について、「どんな人間でも育つ時が来なければ育つものではない」²⁾ という。これは人間の成長を自然の時間の経過に任せ、それに対し人間の無作為であるべしと説く放任主義や自然主義を主張しているものでは決してない。「無理な育て方は人間を虚偽にする。次郎は筆者の空想で無理に育てられてはならない。空想で偶然をつなぎ合わせて、手軽に次郎の『小説』をこしらえあげてしまうことは、これからも生きた『運命』の中で育とうとしている次郎本人にとって、実はこの上もない迷惑なのである」³⁾ と。ここに湖人が「次郎」のすべてを叙述しようとする時の態度、換言すれば湖人の人間観そのものが集約されている。人間の生成は各個人に本質的に具体的な「運命」の生きた発展の展開に於いてあり、決して万人に一般的であるように抽象的、観念的に考えられてはならない。すべての人間は質的に等しい生を与えられているのではない。人間はすでにその出生から「自然人」ではなくて「運命」人である。人間が「虚偽」にではなく、「生きた運命」の中に育つということは、人間が彼の自然性、社会性、精神性の生成過程を通して、自己に本質的な「命」の「運」(めぐりあわせ)を自覚してゆき、それを生き抜くということ、自己に本質的に関わってくるあらゆる条件に着実に対処して、そこから自己の本質に根ざす独自の創造性＝自由を発揮してゆくことである。同時にそれは特殊性を越えて普遍性へ連なる自己の形成を意味して

いる。人間に自己の特殊性としての「運命」が生きて生きと考えられてくると、すなわち自己の本質が自覚的に把握され、それに普遍的意味が与えられると、ここにはじめて「人間」は社会的・歴史的に、具体的に生成する。湖人は人間の抽象的、量的な存在の平等性を否定する。人間に於ける平等は、各個人の本質に根ざした創造的自由の獲得に於いて実現される。社会はこの人間の実質的自由の総括に於いてある。

このような生成は、自然的時間の経過に於ける単なる偶然的事実の堆積に於いて在り得るものではない。人間が時間に於いてあるということは、人間が彼に関わり合ってくる様々な関係をつぎつぎに、量的に、体験し重ねて行くということではなく、そこに於いて人間が自己を中心として、様々な関係をひとつの統一的な秩序に於いて全体的に把握すること、すなわち彼の内に統一的な世界を形成してゆくということである。客観的な時間の運行はそれ丈では人間に何の意味をも附与しない。すでに時間を自己の協力者となし、自己にとり積極的な力とすることも人間の努力による以外にない。時間が人間に対して意味を持ち始めるのは人間の自我の把握——自覚に於いてである。時間は人間の自覚に至るまでの長い期間、その単純な自然の運行を続けねばならない。「運命」を生きたものとし、そのために時間をかけて根気よく人を育ててゆこうとする湖人の「驚くべき忍耐」こそ、「物語」の全篇を貫いている彼の深く確かな人間洞察を物語るものであろう。これを示すことも湖人の思想に於ける論理性と自然性との統一という主題とともに、われわれの課題となるものである。それは人間の生成に関する質的具体的な原理の提示と、それと必然的に不可分離の関係にある時間への反省——歴史的なものへの認識ということである。

註 1) 下村湖人全集 第一巻 あとがき

2) " 第二巻 あとがき

3) " 第二巻 二十

二. 湖 人 の 思 想

1 個人—「運命」

湖人は人間の生命過程の全体を基本的には「運命」—「愛」—「永遠」という3つのモメントの矛盾葛藤の過程と、いまひとつ「運命」—「無計画の計画」—「摂理」という「運命」の自己発展の過程との複線の展開として捉えている。

「運命」とは、湖人に従うと、人間が「この世の空気を多少とも呼吸」¹⁾すると同時に呼吸するところの、人間の自然的存在に必然的な力である。それは「天性」、すなわち人間が生来「天から授かった生命の生地のままのすがた」を「決して生地のままにはしておかないもの」²⁾である。人間はその存在を決して純粹自然的に与えられるものではない。その自然的存在としての生はすでにある特定の社会的・現実的地盤の上に於いてのみ実現されている。人間は「自然人」ではなく「運命」人である。あたかも植物の種が或特定の土壤に播かれると、それ自身に不可抗的な力によって、生成の契機を獲得する如きものである。更に「運命」は人間が存在する限り、常に彼の歩みに執拗につきまとう「影」³⁾の如きものであり、また彼の歩みと共に響く「足音」³⁾の如きものである。

「運命」の意味するところのことは、その理念的内容と現実的内容の検討を通して明らかにされる。「運命」は「天性」を決して生地のままにしておかない力であるが、それに固有の意味は、純粹な、「天から授かった性質」を「ゆがめ、こねまわす」ものであり、「永遠」に向って流れてゆこうとする「生命の流れ」を時には「真暗な洞穴をくぐる水」となすもの、時にはそれを滞らせ、涸れさせようとする頑強な「岩盤」であることにある。⁴⁾それは「永遠」に向う「生命の流れ」に対して反抗の叫びをあげ、それに消極的、否定的、逆行的に作用しようとする自然の活動形式である。従って「運命」の理念的内容属性はいま「怪力乱神」⁵⁾と特徴づけられよう。それは非現実的の神秘に於いて顕現するところの不可視な自然の暴

力的・破壊的力である。それは、人間の側の如何なる状態にも容赦なく、自律的に、コンスタントに運行を続ける自然的時間の非情性に似ている。⁶⁾

「運命」の本来の性質は善でもなく悪でもない。唯この一種の曖昧さは、幸福や善に関係するよりも、むしろ苦悩や悪意に関係し、疑惑と混乱をもたらすためにあると考えられる。

人間が植物とは異って、この自然的暴力としての「運命」を、一定の法則を知ることによって自己の「生命の開拓」への積極的且つ肯定的力となしえる契機はどこに求められるであろうか。ここで「運命」の現実的内容が考えられてくる。

「運命」の現実相は、人間自身の意志が干渉しえるところの、彼を取巻く様々な人間存在の様態においてある、と考えられている。「運命」は実は様々な人間存在の様態、すなわち「愛憎の波」に於いて自らを顕現している。人間が「運命」をこの現実の様相に於いて捉えるということ、すなわち人間が何程か主体的な意志と努力とによって処理可能なものとして、「運命」をみるということは、やがて自然的暴力としての「運命」からの人間による人間の解放を準備し、期待させる。

「運命」の現実的内容は人間の主体的意志との関係に於いて考えられ、それは本来無関心的にして曖昧な「運命」が生命に対して何程かの積極性を萌芽の内に示してくるものである。現実的内容に於ける「運命」は、もはや人間によって無自覚的に受動的、消極的に対されているものではなく、何程か自覚的に、能動的、積極的に対されているものである。人間はここで「運命」に曝されるのではなくて、半ば自覚的に「めぐり合う」のである。

いま、「運命」の変容は人間の主体的な力に依存しているが、それは三段階に分けて考えられる。すなわち「運命」の人間による自覚化の過程に於いて、それは (1) 自然的暴力としての力、(2) あたかも自ら計画したものであったかの如く享受する「運命」=「無計画の計画」、(3) あたかも神の意志であったかの如く主観と客観との一致に於いて享受する「運命」=「摂理」、と発展的に変容する。我々を取巻く様々な偶然——「運命」は人間存在の本質に関わる一形式である——は我

々の「不斷の用意」と「努力」によって、「絶好の機会」として把えられ、更に「不斷の用意」が大きく密であればあるほど「偶然」を「偶然」として放置しないで、それを最大の協力者として享受できる可能性は大きくなる。「偶然」が自己にとって「必然」と享受できる時に人間はそこに超自然的な神の意志の顕現を考えるであろう。人間に於いて、「運命」が「無計画の計画」から更に「至妙な計画」＝「摂理」として主体的・自覚的に把握されてくる過程は同時に人間の存在の特殊性から普遍性への変容を意味している。この最後の段階は人間に於ける主観と客観との合致の実現を示しており、ここで人間は如何なる冷酷な「運命」をも喜んで享受できるという、「自分を磨き上げる力が自分に備わっていると信じること」⁷⁾のできるという、真の「自信」を獲得するのである。「運命」は人間にとって、「悲しいような、恐しいような」ものでありながら、「それでいて、何か気強いような、そして楽しみなような、一種不可思議な感じ」⁷⁾を惹起させるものであると。

「運命」はすべての人間存在に普遍的である。一人としてそれを免れているものはない。それは各個人にそれぞれに存在する。この意味で「運命」とは人間存在の個人性の原理——個人に於けるきまり——である。それは人間の自然的存在に本質的な自然の活動形式である。「運命」は人間の生成過程に於いて、それに否定的なものとして完全否定されるような、或は解消されてゆくようなものではなく、人間精神によって自己独自の位置づけを得るものである。それは各個人の根本的立脚地として、人間の精神化への過程に於いて、社会的に具体的なもの、社会的使命にまで昇華する。自己法則の概念としての「運命」から得られるものは、社会に於ける個人の役割すなわち人間の使命である。ここに於いて「運命」はその抽象的な、個人に特殊な自然性を精神的普遍性へと昇華させ社会に於ける具体的な姿を獲得すると言えよう。

- | | | |
|----|---------|--------|
| 5) | 「論語」卷第四 | 述而第七 |
| 6) | 下村湖人全集 | 第二卷 七 |
| 7) | 〃 | 第三卷 十五 |
| 8) | 〃 | 第二卷 十八 |

2 社会—「愛」

「愛」の理念的内容は、「運命」のそれと反対のものである。それは、「運命」がたえずそれに糧を与えるところの人間の混乱と疑惑—怒り、悲しみ、歎き、疑い、反省、羞恥等々の中で、人間が「ともかくも内なる生命の火をかきたてて生きる望みを失わない」¹⁾ようにさせられる力である。「人間は、全然食物のないところでは生きることが出来ず、全然光のない世界では物を見ることが出来ないと同様、全然愛のない世界では希望をつなぐことが出来ないものなのである」。¹⁾「運命」の冷酷さによって「自己嫌悪」に陥り、「愛」を強いて拒もうとする者には「愛」の努力は必須であるばかりでなく、その時にこそ最もよくその力を発揮するものである。「愛の支えは、いかほど、独立不羈になろうとする生命にとっても必要なのである。愛は、愛を拒もうとするものにこそ、最も聡明に与えられなければならない」。¹⁾「運命」の理念的内容属性を「怪力乱神」とするならば、「愛」のそれはいま「常德治人」²⁾と特徴づけられよう。「愛」は人間の関係的存在に於いてはじめて顕現するところの人間の理性的且つ冷静な、現実的活動形式である。それは人間をして自己の存在を超えた他者の存在と、それと自己との関係へ開眼させる契機となる。この意味で人間の個的存在を社会的存在たらしめるはたらきであるといえよう。この「愛」の理性的且つ冷静な活動はまた人間をして冷酷な「運命」を知的に反省させる契機となり、それは同時に「運命」に対する人間の関係の本能的受動性から理性的能動性への変化を支持するものである。人間の自己へのめざめ——自覚ということは、形式的には自己対象化であり、自ら立ち、自ら決定するものであることを意識することであるが、それはまた自己を取巻く他者へのたえざる開眼と不可分である。人間は自己を対象化し、客観視することによって、現在の自己を

註 1) 下村湖人全集 第三卷 一
 2) 〃 第一卷 三十九
 3) 〃 〃 二十八
 4) 〃 第三卷 一

中心として拡がる人間網を考え、同時に時間的遠近の前後に連続する自己の生活構造の全体に考え及ぶ。理性によって主体的に把握される自己とは、単に空間的・時間的瞬間に於いてある觀念の所産ではなく、現在までに持続して来たところの、その存在そのものの一つの様態（すがた）としてある。この自己はこの持続的關係の意識、すなわち自他を連続して体験することと不可分である。人間の自覚の構造は、人間が自ら立ち、自ら決定する存在であることの根本的であることを否定するものであり、また人間を立て、人間がそれに依存する世界に本質的に連なっていることの意味を含んでいる。自覚とは、従って愛によって契機づけられる自己の本質、「運命」への反省である。

ところで「愛」は、それが人間關係に於いてあり、自らの顕現のために人間存在を必要とするが、これが純粹且つ絶對的な姿で表われることはほとんどない。これは「愛」そのものの力を弱め、人間をしてその純粹な姿をくもりなく観るまでの努力を妨げるものである。「愛」は人間の生命に「不死の水」を注ぐものではあるが、その現実に於ける「傷つきやすい」性格は、時には人間の前に様々な「迷路」を用意する。それはどんな場合でも人間をとらえてはなそうとしないところの「運命」と同様、人間に試練を課すものである。「愛」の現実相——愛憎の關係は、「運命」が人間の自己自身との關係、自己によるその受けとめ方によって三様になったように、自己と他者との關係に於いて多様である。「愛」に於いては、人間が「運命」—「愛憎の波」に客觀的に對しているようにではなく、自ら愛憎の關係の中に在るのである。「物語」に於いて多くの「愛」が示されているが、それらを類型化してみると、「理性的な愛」を頂点とし、「本能的な愛」（偏愛）を最下位のものとして整理できる。「物語」に於いて前者は父によってになわれている「愛」であり、「生命の開拓」のための教育と指導とを果すものである。後者は祖母によって担われている「愛」であり、生命を萎縮さすものであり、「愛」の序列に於いて最も「運命」に近く位置するものと考えられているものである。この種の「愛」の担い

手である祖母が「運命の最も冷酷な代弁者」とされる所以である。「愛_レ之欲_二其生_一、惡_レ之欲_二其死_一、既欲_二其生_一、又欲_二其死_一」³⁾とはこの「愛」を言い当てたものであろう。

「愛」とは「運命」が人間存在の自己法則であるとすれば、人間存在に関する社会の原則と考えられよう。「愛」とは人間關係に於いてはじめて発現するところの人間の他者に対する本能的、理性的、精神的な活動形式である。「運命」は人間にとって無自覚的所与である限り、人間のそれに対する責任は問われないといえる。しかし「愛」は、そこに於いて人間が在り、それによって人間が自覚的に「運命」がもたらす不自由から創造的に自由となりうる力である。同時にそれは人間がそれを信じて、自ら創造してゆかない限り、その理念的内容を顕わさないものである意味で、人間はそれに責任を負うものである。このことはやがて「運命」を自然的所与として問題にしないことを、またこれを生命の浪費、圧殺であるとして、それに対処する人間の責任を同時に問うものとなろう。「運命」はそれに人間の生命が附与され、人間社会において活かされなければならない。「愛」はこのための協力者として、人間に自己を取囲く様々な関連を自覚させ、自己に特殊な「運命」を普遍的な「使命」に転化させる力である。それは個人的なものの社会化原理である。「運命」と「愛」とは理念的内容に於いては非連続的であり、相互否定的である。「愛」は「運命」を否定する概念である。しかしその現実的内容に於いては、両者は連続的であり、相互肯定的である。「愛」は「運命」を自己の内に解消するものではなく、後者の最高形態—社会的具體性—人間に於ける社会的個性の実現を推進するものである。

註 1) 下村湖人全集 第三卷 一

2) " 第十六卷

3) 「論語」卷第六 顔淵第十二

3 文化—「永遠」

「永遠」とは、湖人の言に従うと、生命の流れが「運命の波」に抗し、「愛」の協力を得つつ、「運命の岩盤の底からでさえも新しい水を誘い出

して流れに力を加え」ながらそこへ流れそそいでゆく「海」のようなものである。¹⁾ またそれは高く澄みきって、不動の座に居り、もろもろの星がそれを中心に糸みだれず運行する「北極星」のようなものである。²⁾ それは時空的に人間存在の遠方にあるところの人間の行き着くべき目標でありまた秩序の源泉であるとも考えられよう。それは「運命」の如く妖怪変化を示すものではなく、「愛」の如く人間に「迷路」を用意するものでもない。「永遠」は常に「澄みきった厳粛さ」を人間の心に宿し、人間に現在まで持続してきた自己のすがたを照らし出すことに於いて現在に生き生きと息づいているものである。

「運命」と「愛」とは、一は個人の単独存在に於いて、一は人間関係に於いて、直接的にあるものであるが、「永遠」は間接的且つ客観的に在るものである。この意味に於いて「永遠」は「運命」と「愛」とを自己の内に統一的に内在化させたものであり、また「愛」の「勝利」を意味している。しかし「永遠」の現実_ニに於ける生きた作用は客観的理念そのものの中にはあり得ない。植物が太陽の光を常に同化しつつ、その生命維持の活動を行っているように、「永遠」は人間生命の現実的活動に於いてはじめて生かされる活動形式である。この意味に於いては「永遠」は「運命」と「愛」との否定的契機としてあるのではなく、具体的に存在する「運命」一個人と「愛」一社会に於いてのみ自らの力を発揮するものであり、更に両者に夫々に固有な存在の意味を附与する意味をもつものである。

「永遠」とはここで文化の原理であると考えられる。文化は客観的に存在するものであるが、しかしその生きた力は具体的、歴史的な個人と社会に於いてのみ見られるものであり、歴史的各段階に於いて固有の意味を発揮するものである。文化は現在に於いてある過去の顕現一伝統であり、また現在に意味をもってはじめてその客観的存在を確保しているものである。文化はまた現在に息づく過去として現在に在る人間の未来一創造への基礎となる。文化は現在に生きつつ永遠的なものである。それは過去と未来の高揚された姿を投影してある、現在に生きている力である。この過去と

未来を内在化させつつ現在に息づく文化の具体的・現実的な姿は歴史である。文化の現実的作用は歴史の形成ということである。「永遠」は人間に於いて現在に過去を生かし、未来を創造させようとする歴史意識としてある。「愛」が主として個人に於ける現在まで持続してきたところの自己の存在のすがたの反省を喚起するものであるとすれば、「永遠」は過去と未来との現在に於ける交叉を自覚させ、その深さを認識させることによって、時空的に現在を超えた自己の存在のすがたを予想させるものであるといえる。「永遠」は、「愛」が「運命」の社会的具体性一人間の社会的個性の実現を推進するものであるとすれば、「運命」に歴史的具體性を与え、人間の歴史的個性を明示しようとするものであるといえる。

「運命」は人間存在に本来的なものであり、努力の結果としてあるものではない。「愛」は自己の内に形成して来、自己の身にそなえて来るもの、すなわち人間の生のあらわれである。「永遠」は客観的理念としては、人間がそのものになることは出来ないものであり、それは現在に内在している未来的なものとして人間の創造的活動の源泉である。「志_ニ於道_ニ、拠_ニ於徳_ニ、依_ニ於仁_ニ、游_ニ於芸_ニ」³⁾とある中の「仁」、「徳」、「道」とは夫々人間に本質的なもの、努力の結果獲得されたもの、現在に内在化されている未来として、「運命」、「愛」、「永遠」に対応するものと考えられ、夫々人間存在に関する過去・現在・未来を示している。3者は共に人間に何程か拘束的なものである。人間はこれらの拘束的なものを座標としながら、歴史の時間の中に自由な創造的活動を行うものである（「游於芸」）。ここに確立される主体的自由は拘束的なものを土台としつつ自己の存在を確立しようとするまでの強い意志と不可分であり、それ故に創造を尊び積極的に全体を構成しようとする志向と結びついている。湖人に於ける人間は自己の特殊性の普遍化への過程で、たえず現在を中心として過去と未来とを連続的に体験している歴史的存在である。

註 1) 下村湖人全集 第三巻 一

2) " 第一巻 二十九

3) 「論語」巻第四、述而第七

三. 湖人における人間像

—— 3者の統一的把握 ——

人間はその自然的存在を「運命」と共に得、「愛」と共に社会的存在と自覚し、「永遠」と共に精神的、歴史的な存在となる。「運命」—「愛」—「永遠」は夫々個人の原理、社会の原理、文化の原理であった。「不知命、無以為君子也、不知礼、無以立也、不知言、無以知人也」¹⁾という言葉にある「命」と「礼」と「言」とは、また上述の夫々に対応するものであろう。すなわち「天命」を知るということは、境遇の順逆にとらわれず、安んじて為すべきことを為し、為すべからざることを為さないということの自覚を意味し、「命」とは人間としての根本の立脚地を指したものである。「礼」を知るとは、社会人として必然な社会的規範に対する自覚を意味し、「言」を知るとは、言葉すなわち真理を知ること、すなわち客観的法則にかかった人間の価値判断を指すものである。これら3者の総合的把握は、すでに明らかなように、3者を単純に一線上に把え、「運命」の「愛」への、更に「愛」の「永遠」への単なる発展過程として考えられるものではない。3つのものは夫々その最高形態である「使命」、「理性的愛」、「歴史的意識」を獲得してはじめて人間に於ける固有の存在意味を発揮し、ここに於いて具体的な人間は実現される。

いま仮りに3つのものの総合的把握を理念的に考えるならば、3者は一直線上に位置し、夫々は人間の自然性、社会性、精神性—歴史性に対応し、その発展的段階を示すものと考えられよう。しかしこの場合に於いてもそれは個人に本質的な「運命」の発展的展開と複雑にからまって複線的に展開するものと考えられなければならない。人間の自然性から精神性への発展は同時に正しく自然性の展開を導くものでなければならない。「自然が人間に与えた心のはたらきの中には、何一つとして否定されるべきものはない。それらは常にその分に応じて生かさるべきものなのである。道徳とは、だから、心のさまざまなはたらきに善悪の一線を画して、一方を肯定し他方を否定するこ

とではなく、それらのすべてに正しき序列を与え、下剋上のおそれをなくすることではなければならないのである」²⁾。人間は自己の自然性を自信をもって展開させ、それを必然と体験してゆくことが期待される。すなわちこの場合、「運命」—「愛」—「永遠」は人間一般に普遍的な生成原理であり、「運命」—「無計画の計画」—「摂理」は各個人に特殊な生成原理である。人間の生成はこの2原理に正しく立脚するものでなければならない。後者は前者に促進されて、自己の原理を完成し、前者はそれによってはじめて具体性を獲得することができる。

湖人に於いて人間生成の問題は自然から自然への回帰的過程としてではなく自然から精神への発展的過程として把えられている。同時に湖人に於いて示されたことは、この過程を通して個人の自然的所与「命」が貫徹されてあるということである。自然から精神への過程は自然からの離反の過程とはならず、かえって自然の必然の体験のそれである。自然の否定として社会、その否定として精神が考えられるのではなく、それらは「命」を透して把握される。それは人間存在を自然との連続に於いてとらえ、同時に必然の体験の中に論理を見出そうとするものである。人間の主体的意志の過程は同時に自然力の参与の過程である。こゝに西洋の人間像とは異った東洋の人間像の一典型をみることができると思う。この人間像の考察は社会把握の仕方の意味をもつものであろう。

「運命」と「愛」と「永遠」とは「いろいろな機会をとらえて人生に少しずつお互いに手をさしのべてくる」³⁾。「だが、『運命』と『愛』と『永遠』とは、お互いに完全な握手ができるまでは、決して中途半端な握手はしないものである」⁴⁾

「運命」と「愛」と「永遠」との「接近」の過程は、同時に「『運命』—『無計画の計画』—『摂理』この3つの言葉」が人間に於いて「殆んど同義語と思われるまでに近付いて来る」過程であり、このことは「彼の対人生の態度が、我執と反抗から1歩1歩と謙譲と調和への道を辿りつつある証拠」⁵⁾である。この過程を通して人間は自然的存在から理性的存在に、本能的盲目的存在から

意志的存在に、主我的存在から道義的存在になり、自然が生んだ曖昧な自己を自己自身の手にかけて明晰な自己・理性の所産とし、使命と義務とを果す存在とするのである。

ここに G. ギュルヴィッチの「道徳的経験の構造」に関する叙述が想起される。それによると、人間の直接的な道徳的経験は主体の決定によって与えられた価値、創造によって得た自由において与えられるが、それは潜在的状態では人間のあらゆる意志的行為の中に存する。しかし意志的行為は単なる目標物の追求から、これを否定して目的や無上命令に、更にこれを否定して価値や創造的自由へと向上するところにその道徳的経験の直接性を深める。そこで三つの層が区別される。第一は義務の経験、第二は価値の経験、第三は創造的自由の経験である。

義務の道徳は単に守ればすむというような場合から理念の決定にまで及ぶが、根本的には一定の枠の中でのことで、従うか従わぬかというような二者択一を迫られる制止的な性格をもつ。第二の価値の経験は前のものように、単に選択を迫られるものではなく、より主体的なもので、主体の決定と主体がとらえた価値の展開との統合・相互内在に於いて成立するものである。それは必然に他人の決定に抵抗されるから、ここにまた超個人的な価値を見出すことともなる。この場合愛と同情が人々の良心を浸透させあう意味でこれを支持する。第三の最深の道徳的経験は全く自発的な活動であり、すべての活動には抵抗が必至であるから、それは自己の内に抵抗をやぶってゆく必然の経験を伴うものである。それは単なる形式的自由に対する実質的自由、創造であり、人々の良心の総括に於いて成立する社会的経験である。

ギュルヴィッチの右の区別も言葉をかえていうと、運命づけられた枠の中での経験と、愛に支えられる経験と、本質的に永遠な創造との段階であり、湖人の「運命」、「愛」、「永遠」に対応させられると思う。しかし後者では道徳的経験の三層ではなく、三つの互に並存する原理として与えられている。このことは社会学にとって却って重要な

示唆をもつものとは考えられないであろうか。

註 1) 「論語」巻第十、堯日第二十

2) 下村湖人全集 第十巻

3) // 第二巻 七

4) // 第三巻 十七

5) // 第 巻 十五

〔6〕Gurvitch, Georges: *Morale théorique et Science des Mœurs*, 1937, pp159—178

四. 教育の意味

湖人はその思想に於いて人間に本質的な自然、「運命」に社会を媒介として論理的理性を与えそれを普遍化すること、更に文化の存在を媒介として現在を反省させ、未来を思考させる歴史的意識を培うことを示して、自然と論理、個的なものと社会的なもの、特殊と普遍の統一及び過去と未来の両面に開かれた現在に於ける（未来への）創造意識—歴史意識を主張している。我々はここに抽象的個人主義と汎全体主義との否定をみることができる。このことは同時に個人主義と普遍主義の対立を止揚して、歴史の進歩に関して思惟の形式としての論理主義と心理主義との問題を提起するものである。

以上の湖人の根本思想の実現は、教育においてはじめてなされるものである。教育こそは「人間をして『個』と『全』とを同時に体験せしめ、生命にその正しい生成の機会を与える」¹⁾ものである。教育の目的は単に個人の人格的完成にのみあるのではない。またそれは単に社会的統一のためにあるのではない。教育は人間の個性を育てつつ、更にその個性の時空的深さと広さを反省させることによって歴史的に個性的であるものを育てあげるのである。教育は、歴史を作る作用である。我々は人間を「社会的動物」としてであるよりは、「歴史的人間」として認識すべきなのである。

註 1) 下村湖人全集 第十巻

1964. 7.